

---

# 不良少年とイタコロボット

ほしの すばる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不良少年とイタコロボット

### 【Nコード】

N9503D

### 【作者名】

ほしのすばる

### 【あらすじ】

大河翔は、ロボット作りに没頭して母を死に追いやった父を憎み、ケンカ三昧の日々を送っていた。そんなある日、父親が夏恋というイタコロボットを連れて帰ってきた。翔は父から夏恋を連れて、イタコが存在するという忌野神社に行ってほしいと頼まれる。嫌がる翔だったが、夏恋に強引に忌野神社へ連れていかれることに……。

## 第1話 - 1

オレ、大河翔<sup>たいがかける</sup>は、親父を殺した夢を見ていつも目を覚ます。いつからだろうか、こんな夢ばかり見るようになったのは。イライラする。

寝不足のせいかな？ それとも、腹が減ってるせいなのか？

窓の外から聞こえるウグイスの鳴き声でさえ耳障りな不快な音にしか聞こえねえ。

「うるせえんだよ！」

オレは枕を窓に投げつけると、空腹を満たすために一階へ降りた。誰もいないだっ広いダイニングルームで、オレは昨夜コンビニで買ったサンドイッチを頬張った。

飾りつ気のない出窓から朝日が差し込む。

今まで何度こうやって一人きりで飯を食ってきたかな。最初は寂しいなんて思ってたが、

今は逆に一人の方が気楽でいい。

空腹は満たされたが、オレのイライラは治まらなかった。

ムシャクシャする。誰かをぶん殴らなきゃ気が治まりそうもねえ。

かといって、弱い奴

をぶん殴ってもつまらねえし。けど、この町にはオレの相手になるような強い奴はもうい

ねえしなあ。いつそのことヤクザ相手にケンカでも売るか。殺されるかもな。それも悪く

ねえな。死んじまえばイライラすることもなくなるんだからな。オレが死んだところで悲

しんでくれる人間はもういねえんだし。

「ただいまー」

そんなオレの考えを打ち消す不愉快な声が玄関から聞こえていた。忘れたくても忘れら

れねえ、悩みとはまったく無縁の聞き覚えのあるあの弾んだ声。

オレの神経を逆撫でしやがる。

そんなオレの気持ちなんか気付くこともなく、あいつはスリッパで軽快な足音を立ててダイニングルームに入ってきてやがった。

「おはよー、翔くん」

二カ月と六日ぶりに会う親父は変わっていないかった。

メガネの下のあの線で描いたような双眸も、四十才とは思えない子供のような無邪気な

笑顔も、母さんの七回忌に会った時と何一つ変わっていないえ。

しかも、てめえの後ろにいるその女は何だ？ でかい胸を強調するよつな、胸元が大き

く開いた服を着てニコニコしてやがる。親父の大学の教え子かなんだか知らねえが、余所の女をこの家につれてきやがって。何考えてやがるんだ？

親父のやることは全部オレの神経を逆撫でする。

母さんを殺しておいて何であんたはそんなにヘラヘラと笑っているやがる？

オレの中でのあの悪夢がいつ現実になってもおかしくなかった。

それくらいオレは親父

を憎んでいた。だけど、親父にはそんなオレの気持ちは通じねえ。

「春休みだというのにちゃんといつも通りに起きているなんて関心ですねー。美味しそう

なサンドイッチですねー。一ついただいでかまいませんか？」

親父は後ろに立っている乳デカ女のことを弁解することもせず、オレの前に座った。

オレは残っていたサンドイッチを一気に頬張った。

「お前に食わせるモンは何もねえんだよ」

「おやおや」

オレがそんな態度に出ても親父はシヨックを受けた様子も見せずいつもの笑顔で肩をすくめた。

それがオレを余計にイラ立たせてるのがどうしてわかんねえんだよ！

「ちよつと翔ちゃん！ それがお父さんに対する態度なの？」

乳デカ女がいきなりオレと親父の間に割って入ってきたかと思うと、ダイニングテーブルを叩きつけた。

ばきつ。

乾いた音を立ててダイニングテーブルが真つ二つに割れた。

「なっ？」

啞然とするオレとは対照的に、親父は相変わらず笑顔を崩さない。

「ごめーん、教授。まだ力の加減がわからなくってえ」

乳デカ女は悪びれた様子も見せず、ペロつと舌を出した。

「いいんですよ、夏恋<sup>かれん</sup>。形在るものは必ず壊れるんです。テーブルは買えば済むことですから」

「いいわけねえだろう！ このテーブルは母さんが生きてた頃からずっと使ってきたんだぞ！」

「桃子<sup>ももこ</sup>さんは心の広い人でしたからきつと許してくれませよ」

「許すわけねえだろう！ こんな女家に連れ込みやがって！」

まったく怒る気配を見せない親父に、オレの堪忍袋の緒がついに切れた。

オレは親父に殴りかかろうとした。

悪夢を思い出す。オレはこうやって親父の顔面に右拳を繰り出す

んだ。そして、オレの  
強打を喰らった親父は吹き飛ばされて壁に頭を打ちつけて……。

## 第1話 - 2

が、悪夢は現実のものにはならなかった。

オレの拳は夏恋と呼ばれた乳デカ女にあっさりと阻まれたのだ。バカな……。『瞬殺の右拳』と言われたオレの拳を最も簡単に受け止めやがった。

この女何者なんだ？

「お父さんに暴力奮っちゃダメでしょう」

「うるせえ！ 母親気取ってるつもりかよ？」

オレは夏恋の手を振り払った。

「母親？」

オレの言葉に、夏恋は何度か目をパチパチとさせて親父の顔を見て笑い始めた。

「やだやだ、翔ちゃんったらあ。やきもち？ お父さんを私に取られると思ったのー？」

髪の毛金髪に染めて反抗期気取ってみせてもやっぱりまだ子供なのねえ」

何なんだ、この女は？ 人のこと小バカにしゃがって。

「母さんを殺した男になんか誰がやきもちやくかよ！」

オレは横目で親父を見た。反応が知りたかった。けど、それは無意味な行為にすぎなか

った。親父は表情を変えることなく笑っていた。逆に夏恋の方がピタッと笑うのをやめて、

オレに真摯の眼差しを向けてきた。

「逆恨みもいいとこね。そんなこといつまでも言ってるからガキだつて言うのよ」

「な！」

オレは一瞬言葉を失った。

五年前、母さんは大学の研究室にこもっていた親父の着替えを届けに行く途中に交通事故

故に遭って死んだ。親父はオレが物心ついた頃にはいつも研究室にこもっていてほとんど

家に帰ってこなかった。だけど、母さんは親父のこと一度も悪く言ったことはなかった。

親父は夢を追い掛けている立派な人間だと、いつも笑ってそう言っていた。オレに言わせ

れば親父はただのロボットマニアだ。親父さえちゃんと毎日家に帰ってきてくれてさえい

れば、母さんは事故に遭わずにすんだんだ。死ぬことなんかなかったんだ。

だから、これは逆恨みなんかじゃねえ。母さんを殺したのは親父なんだ。

オレは自分の胸に何度もそう言い聞かせてきたんだ。

「夏恋、僕のかわいい息子をあんまりいじめないでくれるかな？」

「でも、こういうことはハッキリさせておいた方がいいんじゃない？」

「翔くんは多感なお年頃ですから」

「もう甘いんだから、教授はあ」

夏恋は頬を紅潮させて親父の左腕をつかんでぶんぶんと振り回す。

何なんだよ、このほのぼのとした雰囲気は。

「翔くん、安心してください。僕は再婚なんかしませんから」

誰もそんなこと心配してねえよ。

「夏恋はね、僕が作ったロボットなんですよ」

「ロボット？」

オレは夏恋を一瞥した。

表情、言葉遣い、皮膚の感触。どれをとっても人間と何ら変わら

ねえ。

「そうですね。夏恋は僕が十二年掛けて作り上げた最高のイタコロボットなんです」

オレは改めて夏恋をマジマジと見つめた。確かに科学は進歩してきている。人間タイプ

のロボットとかもテレビで見たことがある。だけど、そのロボットはぎこちない動きでコ

ンピュータみたいな抑揚のない声を発していた。こんな人間そっくりなロボットが存在す

るなんて聞いたこともねえぞ。

オレは夏恋に疑惑の眼差しを向けたまま。

「イタコだかイカダか知んねえけど、もっとマシなウソはつけねえのかよ？ エープリル

フルは昨日だぜ」

「教授はウソなんかついてないわよ。そんなに信じられないなら、私がロボットだってい

う証拠を見せてあげるわ」

夏恋は胸元が大きく開いたシャツのボタンを恥じらうことなくど

んどん外していく。

夏恋の豊満な胸が露になって、オレは思わず目を逸らす。

「ほら、翔ちゃん見て」

「んなもん見たかねえよ！」

「もういいからちゃんと見て！」

夏恋は背けていたオレの頭を両手で挟むと、強引に自分の方へ向

き直させようとする。

オレは必死に抵抗したが、夏恋のバカ力には叶わなかった。

「……………」

オレは夏恋の胸元を凝視した。

豊満は胸の谷間に単一サイズの乾電池が一個はめ込まれていたか

らだ。

「夏恋は省エネタイプでしてね、乾電池一個で一カ月は動けるんですよ。そのうち、充電

式乾電池対応にしようとは思ってるんですけどね。あ、それよりもソーラー発電の方がいいですか。これからはエコロジーの時代ですから」

「ね、これで私が人間じゃないってわかったでしよう?」

シャツのボタンをはめながら、ウインクする夏恋。

夏恋がロボットだってことは認める。それを作った親父はすごいかもしれねえ。だけど、

自慢げに夏恋ことを説明している親父を見ると無性にイラ立ってくる。

「こんなもん作るために何年も母さんとオレを放ったらかしにしたのかよ?」

「こんなもん、って失礼ねえ。私は教授と桃子さんの」

「夏恋」

親父が夏恋の言葉を制した。オレの問いには答えもせず。

「あなたはちよっとおしゃべりがすぎますねー」

「はい、ごめんなさい」

「翔くん、急で申し訳ありませんが、夏恋と一緒に隣町の忌野神社いまわのじんじやへ行ってくれませんか?」

「どうしてオレがそんなところに行かなきゃならねえんだよ?」

「理由は私が行きながら話してあげるわ」

夏恋はオレの体をひよいと軽く左脇に抱えた。

「おい、何しやがる? オレは行くなんて言っただけぞ!」

「じゃあ、教授。行ってきまーす」

夏恋はオレの意見をまったく無視して、親父に笑顔を振りまいてダイニングルームを出ていく。

「頼みますね、夏恋」

嫌がるオレを気にも止めず、親父は笑顔でオレたちを見送った。  
オレのイライラは募るばかりだった。

## 第2話 - 1

夏恋は左脇にオレを抱えたまま、物凄い速度で走っていた。前を走っていた原チャリなんか簡単に追い越して行きやがる。追い越された原チャリの男が茫然とした顔をしているのがわかる。

オレは夏恋がロボットであることを改めて実感した。

「降ろせよ!!」

こんなところ知ってる奴に見られたらいい笑い者だ。

「いやーよ。だって、翔ちゃん、降ろしたら逃げちゃうもの」

だが、夏恋はオレを降ろそうとはせず、走り続けた。

「翔ちゃん、イタコって知ってる？ イタコっていうのはね、死霊の降霊を行なう巫女のことなのよ」

「……………」

オレは無言の抵抗をした。

そんなオレを見て、夏恋はクスクスと笑いだした。

「翔ちゃんって、ホント子供よねえ。ま、仕方ないか。多感な年頃の十四才だもんね」

明らかに小バカにした口調だった。さすが親父が作ったロボットだ。人の神経逆撫でするようなことしか言わねえ。

「知ったふうな口きくんじゃねえよ、ロボットのくせに」

「あら、ロボットだからってバカにしないでくれる？ 私の人工知能は桃子さんをデータ

ベースにして作られたんだから」

「母さんはお前みたいにベラベラしゃべる怪力女じゃなかった」

「それは翔ちゃんの違い出が美化されていて、本当の桃子さんを見ようとしてないだけじ

やなーい？」

「……………」

凶星をつかれたようで、オレは一瞬言葉が出てこなかった。

「ロボットのくせに生意気なんだよ！」

何とか言葉を吐き出すと、オレはそっぽを向いた。

夏恋にはオレの心の中を見透かされているようで居心地が悪かった。早く夏恋と離れた

かった。このままだと自分の心の奥に隠している感情までも見透かされてしまいそうな気がしたからだ。

「忌野神社には本物のイタコがいるんだって」

夏恋はオレの気持ちを知ってか知らぬか、話を元に戻した。

「私の場合、イタコに関するデータはすべてここに入ってるんだけど」

夏恋は空いた右手で自分の頭を差した。

「やっぱり実践となるとね、データだけじゃダメなのよ。だから、教授は私に忌野神社で

イタコ修業をさせようとしたってわけ」

「だったら、お前一人で行けばいいだろう」

「それはそうなんだけど。ほら、私って外見はこうだけど」

夏恋は風になびいている長い茶髪を指に巻きつけ、自分の色気をアピールしてみせた。

見た目は二十才そこらの女と何ら変わらない。

「今朝生まれたばかりで、言わば赤ちゃんと同じなのよ。だから、一人じゃ心細いじゃない

い」

「だったら、親父といっしょに行けばいいだろうが！」

「教授はダメなの」

「何でだよ？」

夏恋はふてくされていているオレの顔を見て、

「ひ・み・つ」

小悪魔的な笑みを浮かべた。

ムカツク、この女！

隙を見つけて胸元の乾電池抜いて必ずぶっ壊してやっからな！

「まあ、いいじゃないの。何事も経験よ、経験」

そうこう言っているうちに、いつの間にか忌野神社へと続く階段の下まで来ていた。

自転車なら三十分はかかる距離を、夏恋は五分程度で来ちまっていた。

夏恋は軽快な足取りで階段を上っていく。

「到着！」

階段を上り切った鳥居の下で、夏恋はやっとオレを降ろした。オレはとつさに踵を返し

て階段を降りようとした。

が。

「ここまできて往生際が悪いわよ、翔ちゃん」

夏恋に右腕をしっかりと掴まれていて、脱出は不可能だった。

オレは小さく舌打ちした。

こんな陰気臭い神社、オレみたいな人間が来る所じゃねえぜ。

静まり返った境内は社を中心に、左側には小さな池があった。池を取り囲むように咲い

ている桜が風に揺れると、花びらが水面に落ちていく。社から少し離れた右側には古ぼけ

た平屋の一軒家が建っている。どこからか水の流れる音が聞こえてくる。裏山の方にも

滝があるんだろうな。

「誰もいないのかしら？ すいませーん！」

夏恋が声を上げると、社の裏から竹ぼうきを持った巫女さん姿の女の子が顔をのぞかせた。

「はい、ただ今参りますので、少々お待ちください」  
オレたちに気付いた巫女さんは駆け寄って来る。

「あー！」  
慌てていたせいか、巫女さんは袴の裾を踏ん付けて玉砂利の上で見事にすっころんだ。

巫女さんはすぐに飛び起きると、顔を真っ赤にして袴の裾を持ち上げながら歩いてくる。

おいおい、あんな鈍臭そうなのがイタコっていうんじゃないだろうな。

「おはようございます。口寄せのご依頼でしょうか？」

笑った顔が幼く見えた。オレと同じ年くらいか。

長い黒髪を一つに束ねて、巫女さん服着てると多少は大人びて見えたりもするが。

「口寄せの依頼じゃなくて、イタコの修業をさせてもらいたいんですけど」

夏恋の言葉に巫女さんは大きな双眸をパチパチさせてしばし茫然としていたが、いきなり瞳にキラキラ星を浮かべた。

「感激です！ 私以外にもイタコになりたいって思ってる人がいたなんて」

「じゃあ、あなたも？」

「はい。私、ここでイタコ修業させてもらっている桜木萌花さくらぎもほのかって言います」

巫女さん 萌花は礼儀正しくペコリとお辞儀してきた。

「私は夏恋。こっちの目つき悪いのがただ今反抗期中の大河翔くん。よろしくね、萌花ちゃん」

夏恋のぞんざいな自己紹介にも関わらず、萌花は臆することもなくオレに笑顔を向けてくる。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

世間知らずなお嬢様なのか、頭のネジが二、三本緩んでんのか知んねえけど、オレの中

で萌花と母さんのイメージが重なった。母さんはどんな時でも笑顔を絶やさなかったからな。

「お師匠様は今お仕事ですので、中でお待ちください。どうぞ、こちらです」

オレたちは萌花に促されて社の中に入った。

オレはもう逃げられないとこまできちまったのかもしれない。

## 第2話 - 2

オレたちが通された部屋は、待合室だった。

八畳程の和室に座布団が置いてあるだけの質素な部屋だった。壁には『口寄せ料三千元』

と書かれた貼り紙と、『恐山大祭』や『秋詣り』と大きく書かれたポスターが貼ってあった。

「恐山つてね、イタコの本場なのよ。で、毎年開かれる恐山大祭や秋詣りには青森県のイタコが一斉に集まるんだって」

聞いてもないのに、イタコについてのうんちくを夏恋がしゃべりだす。

オレは無視を決め込んだ。

と、そこに萌花が入ってきた。

「失礼します」

萌花はお盆の上にお茶を二つ乗せて歩いてくる。その足取りが妙にぎこちなかった。

「あ」

萌花はまたしても袴の裾を踏ん付けた。

「あぶない！」

咄嗟に夏恋が萌花を受けとめる。萌花は倒れずにすんだが、萌花の手の中にあつたお盆

は宙を舞った。そして、お盆の上にあつた湯呑みはオレの頭上でキレイな弧を描いた。中

に入っていたお茶を撒き散らしながら。

「……………」

「きゃあ、大変！」

「あらあら。翔ちゃんって意外と運動神経鈍いのね」

慌てふためく萌花とは対照的に、夏恋は小悪魔的な笑みを浮かべて皮肉った。

オレは熱いのを我慢して、夏恋を睨みつけた。いちいち癪に障る口ポツトだ。

「大丈夫ですか、翔さん？」

萌花が懐からハンカチを取り出して、濡れたオレの頭を拭く。柑橘系のほのかな香りが

一瞬だけオレの心を和ませた。

「よかつたわね、翔ちゃん。萌花ちゃんに拭いてもらえて」

「うるせえ！」

夏恋に心を見透かされたような気がしたオレは、夏恋の言葉を否定するために萌花のハンカチを払い除けた。

「ごめんなさい」

オレは萌花に背を向ける格好となってしまうたので、萌花が今どんな顔をしているか見ることはできなかつた。しかし、声のニュアンスで落ち込んでいるのがわかる。

「いいのいいの。気にしないで、萌花ちゃん。翔ちゃんはテレてるだけなんだから。あー見えても純情な子なのよー」

夏恋は勝手なことを言いたい放題で萌花を慰めていた。オレに対する態度とはえらい違いだ。

「ねえねえ、萌花ちゃんはここにきてどれくらいなの？」

夏恋が話題を切り替えた。

「二年です。中学を卒業してすぐにここに弟子入りさせてもらいましたから」

「ってことは、萌花はオレより年上ってことか？ 童顔なんだな。

鈍臭いトコがあるから

余計に子供っぽく見えるんだ。

ふてくされていているオレを無視して、二人の話は続いた。

「修業はきつくない？」

「はい、確かにきついんです。私ってトロイからお師匠様に叱られてばかりで」

「怖い人なのね」

「そんなことないです。あまり感情は表に出さないんですが、本当はやさしい人なんです  
よ」

「ふーん。で、萌花ちゃんは どうしてイタコになろうって思ったわけ？」

「悠花はるかに、妹に両親と話をさせてあげたいんです」

「妹さんに？」

「はい。私の両親は妹が物心つく前に事故で亡くなったんです。私には両親との思い出があるけど、妹にはそれがありません。妹はそのことをずっと悔やんでました」

「でも、イタコになるには早くても四年はかかるのよ。だったら、萌花ちゃんがイタコに

ならなくても三万円払って口寄せしてもらった方が早くない？」

夏恋の意見はもつともだった。

「それじゃダメなんです。私がイタコになれば妹はいつでも両親と会えます。辛い時も嬉

しい時も。私がおわせてあげたいんです。私、勉強や運動は全然ダメだったけど、幸いな

ことに小さい頃から少しだけ靈感みたいなものがあつたから」

ただの鈍臭い女かと思つてたけど、自分の考えをちゃんと持つて前向きに生きてんだな。

母さんの死を悲観して親父を憎み続けてきたオレとは大違いだ。

「えらいわ、萌花ちゃん！」

横目で夏恋が萌花を抱き締めているのが見えた。

やばい。夏恋のバカ力で抱き締められたら、萌花のか細い体なんかあつという間にへし折られちまうぞ。

「離せ、バカ女！」

オレは萌花から夏恋を引き離そうとした。

萌花はわけがわからずきよとんとした顔をしているが、夏恋にはオレがしようとしてい  
るこの意味がわかつちまったんだろう。得意の小悪魔的な笑みを浮かべている。

「大丈夫よ、もう力のセーブはできるようになったから。けど、進歩ね。翔ちゃんが他人  
のことを心配をするなんて」

「うるせえ！ ロボットのくせにオレのすることにいちいち口出しすんじゃないよ！」

居心地が悪かった。今すぐにもここから逃げ出したかった。  
そんな時。

「私はこの稼業に命賭けてるんだよ！ そんな脅しには屈したりしないよ！ とつとと帰  
つておくれ！」

貫禄のある女の怒声が聞こえてきた。声の感じだと年寄りだ。

その直後、障子越しにドタドタとロウ力を足早に歩いていく足音が聞こえてきた。

「ちよつと失礼します」

萌花もただならぬ気配を察したのか、軽く会釈すると慌てて部屋を出ていった。

「どうしたのかしら？」

夏恋は萌花が歩いていった方を見ている。

チャンスだ。夏恋の注意が他に向いている今のうちに帰ろう。

しかし、立ち上がったオレの体は夏恋に引き戻される。

「離せよ！」

「逃げないで」

「逃げる？ オレが誰から逃げんだよ？」

「ねえ、翔ちゃん。おばあちゃんに会いたいって思ったことはなかった？」

オレの問いに答えず、夏恋はいきなり場違いな質問をオレにしてきた。

「どうしてそんなこと聞くんだよ？ 会いたいって言ったら、お前がイタコになって会わせてくれんのかよ？」

オレの答えに、夏恋はガツカリしたような顔を見せて大きくため息をついた。

確か親父方のじいさんとばあさんは親父が高校生の時に離婚して、オレが生まれる前に

ばあさんは病気で死んだって言ってたな。じいさんは再婚して今もどっかで暮らしてるら

しいが。そういえば、オレは母さんの生い立ちについて何一つ聞かされていない。どこで

生まれてどんな風に育ったのか。母さん方のじいさんとばあさんのことだって一度も聞いたことがない。

「どうして死んでるって決め付けちゃうわけ？ 翔ちゃんも鈍いわね」

「どっという意味だよ？」

「忌野神社はね、桃子さんの」

夏恋が言い掛けたところに、萌花が再び部屋に入ってきた。

「お待たせしました。どうぞ」

オレは夏恋の言葉の続きを聞くこともなく、夏恋に手を引っ張られて萌花についていった。



### 第3話 - 1

次に通された部屋は、待合室とは比較にならない大きさの部屋だった。

天井には大きな縄が張られている。部屋の上座には、米俵が積み重ねられていて、何やら

らお札のようなものが突き立てられていた。

その米俵の前に、白い巫女さん服を着た小柄なばあさんが正座していた。

さつき大声で啖呵切ってたのはこのばあさんか。

萌花は一礼すると、自分の仕事に戻っていった。

オレの頭の中には夏恋の言葉が引つ掛かってしょうがなかった。

夏恋はあの後何て言う

うとしたんだ。母さんとこの神社はどんな関係があるんだ。

くそー、またイライラしてきやがった。

「お前かい？ イタコになりたいっていうのは」

ばあさんは正座したまま、夏恋を見据えた。まるで獲物を狩るライオンのような、そんな鋭い眼光を放っていた。しかし、夏恋にそんなもの通じるわけもなく、あいつは笑顔を返す。

「初めまして、梅子さん。私、夏恋って言います。イタコの修業をさせてください」

このテのばあさんは夏恋みたいなチャラチャラした女は嫌うはずだ。弟子入りなんか許可するはずがねえ。

「ダメだね」

やっぱりな。当然の結果だ。

「どうしてなんですか？」

「心を持たない人形がイタコ、つまり神の嫁になれるわけがないだろっ」

「……………」

オレは啞然とした。このばあさん、只者じゃないと思ってたが、一目見ただけでどうし

て夏恋が人間じゃないってわかったんだ？

だが、夏恋は動じていない。

「さすがは梅子さん。でも、私はAIっていう心をちゃんと持つてるのよ」

「何しに来たんだい？ あのからくり好き男の差し金かい？ 孫の顔でも見せれば私が許すでも思っただのかい？」

からくり好き男って、もしかして親父のことを言ってるのか？ だとしたら、孫ってのはもしかして。

「教授はそんなせこいマネするような人じゃないわ。ただ梅子さんに翔ちゃんを会わせただけだよ」

「おい、夏恋！ これはどういうことだ？」

オレは夏恋とばあさんの間に割って入った。

「教授はただ二人を会わせたいだけみたいだったけど、私がロボットだってバレちゃった

時点で隠してるわけにもいかなくなっちゃったわね。もっとも私はしゃべる気まんまんだっただけ」

オレは夏恋の次の言葉を待った。

体が熱い。鼓動が高鳴る。

たった数秒のことがオレにはとてつもなく長い時間に思えた。

「忌野神社はね桃子さんの実家なの。で、目の前にいる人が桃子さんのお母さん。つまり、翔ちゃんのおばあちゃんってこと」

「……………」

オレはばあさんを見た。

この人が母さんの母さん？　けど、こんなに近くにいてどうして一度も会わせてくれなかったんだ？　どうして今頃になって会わせる？

親父は何を考えてるんだ。

「どうやらこの子は何も聞かされていないようだね」

ばあさんは呆れた様子で、ゆっくりと立ち上がる。

「お前の父親はね、私の大事な娘を奪った外道なんだよ」

「あら、人聞きの悪い。桃子さんはイタコの道を捨てて教授を選んだだけじゃない。愛に

生きる女性つてステキじゃない」

緊迫したムードそっちのけで、夏恋はロマンチックに浸っていた。

「何が愛だい。あんな男の下へ行かなければ早死にすることもなかったのに」

ばあさんは吐き捨てるように言った。

ばあさんは最愛の一人娘を奪った親父を憎んでるんだ。オレと同じだった。いや、その憎しみはオレ以上かもしれない。

「だから親父のこと憎んでる者同士一緒に暮らせてることがか」

オレは小声で呟いた。

「翔ちゃん、教授のこと誤解しないでほしいの。教授は翔ちゃんに強い子になってもらいたい。

母親の死を乗り越えて、笑顔を取り戻してもらいたい」

「そう思うならためえでやればいいだろうが！　ロボットなんかに頼りやがって。だい

たいこんな風になったのは誰のせいだと思ってんだよ？」

オレは夏恋に殴りかかっていた。夏恋はよけようとはしなかった。ただ黙ってオレの拳

を真正面から受け止めていた。

くそ。ロボットのくせになんでもお見通しって顔しやがって。

オレを哀れみの目で見ろな！

イライラする。相手はどうせロボットだ。殴ったって痛みなんか感じないんだ。

「？」

オレは夏恋の顔を見て、拳を止めた。

夏恋が泣いているように見えたからだ。

### 第3話 - 2

「教授、言ってたよ。翔ちゃんが小さかった頃は桃子さんと大学の研究室によく遊びに来てたって」

「ウソだ」

「ウソなんかじゃないよ。翔ちゃん、大きくなったら教授と一緒にロボットを作るんだって言ってたって、教授すっごく嬉しそうに話してくれたもの」

「オレが？」

「そうよ、翔ちゃん。思い出して。桃子さんの死と一緒に楽しかった思い出まで封じ込めないで」

オレの頭は完全に混乱していた。

わかんねえ。何も考えられねえ。

「翔ちゃん！」

「黙れ！ ロボットのくせにオレに説教なんかすんじゃねえよ！」

「じゃあ何で親父は今までオレのこと放ったらかしにしてたんだよ？」

「それは」

「お前たち！ ケンカするなら外でやっておくれ。ここは神をお迎える神床なんだからね」

パニックになっていたオレと違ってばあさんは冷静だった。

「だけど、一本の電話がばあさんの顔色を変えることになる。」

突然鳴り響く『運命』。

ばあさんは懐から携帯電話を取り出すと、着信ボタンを押した。

「もしもし」

ばあさんは小声で何度か受け答えすると、萌花を呼んだ。しかし、萌花は現われなかった。

萌花が来ないことを確認したばあさんは、

「わかった」

と短く言い捨てて電話を切った。

「梅子さん、萌花ちゃんに何かあったの？」

「お前たちには関係のないことだ。とつととお帰り」

「ウソはダメよ、梅子さん。右の眉がピクピク動いてるわよ」

今まで平静を装っていたばあさんの表情が硬張ったのがわかった。

「どうしてそれを？ それは桃子しか知らぬはず」

「私のAIには桃子さんから聞いていた梅子さんのデータも全部入ってるの」

夏恋は得意げにウインクしてみせた。

ばあさんは観念したような吐息をもらした。

「萌花が岩金組に誘拐されたんだよ」

「誘拐？ どうして萌花ちゃんが？」

「私があいつらの依頼を断ったからだろうね」

さっきの啖呵はそいつらに切ってたのか。ヤクザ相手に啖呵切るなんて大したばあさんだな。

「断ったって、どうして？」

「私は理由の言えない口寄せはやらないことにしてるんだよ」

「その人たちは誰を口寄せしてもらおうとしたの？」

「さあね。札束積み上げてくるぐらいだからロクな人間じゃないだろう。さあ、これで満

足だろう。お前たちはお帰り」

「ここまで聞いておいて帰れるわけないでしょう。萌花ちゃんは私にとっても大事な姉弟

子なんだから」

「弟子にした覚えはないよ」

「そんな難しいこと言わないで。ねっ」

夏恋は右脇にばあさんを抱えた。

「何するんだい？」

「決まってるでしょう。萌花ちゃんを助けに行くのよ」

夏恋はオレを見た。次の展開が安易に予測できた。

「さ、翔ちゃんも行くわよ！」

夏恋は有無も言わず、オレを左脇に抱えると、忌野神社を後にした。

## 第4話 - 1

「ちよつと待て！」

岩金組と書かれた看板を掲げた大きな門扉の前でオレは叫んだ。

「なあに、翔ちゃん」

「オレは関係ないだろう、巻き込むな」

「関係ないわけではないでしょう。萌花ちゃんは梅子さんにとって娘も同然。つまりは翔ちゃん

んの家族ってことでしょ」

オレは夏恋の左脇に抱えられたまま、右脇に抱えられているばあさんを見た。

ばあさんはぷいとそっぽを向きやがった。ばあさんにとってオレは孫だと認められてね

えんだろうな。ま、オレだっていきなりばあさんだって言われても実感わかねえからな。

「ここからは私一人で行くからお前たちはお帰り」

「一人より三人の方が心強いわよ、梅子さん」

そう言うと、夏恋はハイヒールで頑丈そうな門扉を蹴破った。

「何だ何だ？」

「出入りか？」

「どこの組のモンだ？」

だだっ広い日本庭園には目を血走らせたチンピラたちがオレたちを待ち構えていた。

ま、当然の結果だ。

「夏恋、もう逃げねえから降ろせ！」

オレは夏恋の腕からすり抜けると、サングラスをかけているチンピラにアッパーを喰ら

わした。まともに喰らったチンピラの体躯が数センチ浮かび上がる

と、かけていたサングラスが宙を舞った。チンピラは白目を剥いて倒れた。透かさずオレは隣にいたチンピラの腹に蹴りを喰らわせる。腹を押さえて悶絶するチンピラを尻目に、オレは中指を立てて他の奴らを挑発した。

「クソガキが！」

「ぶっ殺してやる！」

頭に血が上ったチンピラたちは懐からナイフを取り出す。

オレはムシヤクシヤしてんだ。このイラ立ちが少しでも治まるんならヤクザだろうが警官だろうがこの『瞬殺の右拳』で打っ飛ばしてやんぜ。

こうなりやヤケクソだ。殺されたってかまわねえ。

「翔ちゃん！」

夏恋の制する声が聞こえたが、関係ねえ。

オレは飢えた野獣のようにチンピラたちに飛び掛かった。しかし。

「止めねえか！」

ドスの効いたその声にチンピラたちの動きが止まった。そして、オレの動きは夏恋に右

腕を捕られて封じられた。オレは小さく舌打ちした。

「その方たちは四代目の大事な客人なんだぞ！」

開き戸の大きな玄関から黒スーツ姿の体躯のいい男が出てきた。

五分刈りの頭髪と左頬

の大きな傷痕がヤクザであることを強調しているように見えた。

「杉田、あまり大きな声を出すとご近所に迷惑です」

「すいやせん、四代目」

杉田と呼ばれた男は、後ろにいるひよる長い男に頭を下げた。

紺と白のストライプのスーツにチェック柄のネクタイ。インテリがかけてそうな金縁の

メガネをかけた悪趣味極まりないこの男が岩金組四代目組長だとい  
うのか？

「私、へびって苦手なのよね」

夏恋が小声で呟くのが聞こえた。夏恋にはあの男のイメージがへ  
びだったんだろうな。

ま、似てるか。執念深そうな顔してっからな。

「てつきり一人で来られるのだと思ってましたが、これはまた心強  
い助っ人を連れてきた  
ことですね」

ねちねちとお遠回しな言い方をしゃがる。いけ好かない野郎だ。

「この子たちが勝手についてきただけだ。ここからは私一人で」

「そうはいきませんよ。せっかくここまで来ていただいたのですか  
ら、丁重にお持て成し

させていただきます。柏木」

「はい」

岩金の後ろに控えていた黒スーツを身に纏った若い男が出てくる。

「この方たちを例の部屋へ案内しなさい」

そう言い残して岩金は奥に入っていった。

「どうぞ、こちらへ」

オレたちは柏木の案内で家の中に入った。

中庭が一望できる縁側を通って、オレたちは突き当たりにある書  
斎に通された。

柏木は本がぎっしりと詰まった書棚から一冊の分厚い本を取り出  
した。すると、書棚が  
ずるずると移動しそこから扉が現われる。お約束の隠し扉ってやつ  
だな。

オレたちは柏木について薄暗い階段を降りていく。その先にまた  
扉があった。

「へえ、こんなトコに部屋があるなんて」

夏恋はちよっと感心したようだった。

中に入ったオレの目に一番に入ってきたのは、銀行にあるような大きな金庫だった。

「萌花！」

ばあさんには萌花が最初に目に入ったんだろう。

萌花はロープで縛られたままソファに座らされていた。そして、その横には岩金が卑

しい目を細めて萌花の肩に手を乗せて座っていた。後ろには杉田っていう男が立っている。

あの体躯からいってボディガードといったところか。

「さあ、お前の要求通り来たんだから、萌花を離してもらおうか？」

ばあさんは岩金を睨みつけた。しかし、岩金は萌花を離そうとはしなかった。

「何か勘違いしていませんか？ あなたはまだ私の要求は呑んでいないですよ」

「私は理由の言えない口寄せはやらないことにしてるんだよ」

「ここまで来てそんな強気が通用すると思ってるんですか？ かわいいお嬢さんの

顔に傷がつかないうちに、私の言うことを聞いた方が賢明というものですよ」

岩金が指を鳴らして合図すると、後ろに立っていた杉田が萌花の頬にナイフと突き立てた。

「萌花！」

「お師匠様、ダメです！ こんな人の言うことなんか聞かないでください！」

萌花は涙目になってガクガクと震えながらばあさんに訴える。

しかし、萌花の懸命の訴えは岩金を刺激するだけだった。

「お嬢さん立場というものがわかってるんですか？ あなたにそんなことを言う権利はど

こにもないんですよ」

岩金は萌花の髪の毛を引っ張り上げる。

「きゃっ」

苦痛に顔を歪める萌花。かわいそうにな。イタコになろうなんて思わなければこんなこ

とに巻き込まれずにすんだっていうのに。

「ちよつとあなた、女の子になんてひどいことするの！ どうしてそんなことしてまで梅

子さんに誰を口寄せしてもらおうと思ってるの？」

岩金が怪訝な顔で夏恋を見る。

「あなたは何なんですか？」

「私は梅子さんの二番弟子の夏恋よ！ こっちで威嚇しまくってるのが梅子さんの孫の翔

ちゃんよ！」

ヤクザ相手に何自己紹介してんだよ、あのおせつかいロボットは！

だが、岩金は怒る様子もなく、鼻で笑い飛ばした。

「師匠に似て気の強いお嬢さんですね。そのあなたの度胸に免じて教えてあげましょう。」

私が呼んでもらいたいのは、先代の霊です。この金庫は先代の全財産が入っているんです。

しかし、金庫を開けるには、先代の指紋、網膜、声紋が必要なので

「それで梅子さんに口寄せを？ でも、声だけじゃ」

「指紋と網膜なら、ここにちゃんと用意してますよ」

岩金は懐から小さなビンを二つ取り出した。

そのビンの中には、眼球と指が一本入っていた。たぶんホルマリ

ン漬けにでもしてるんだろつ。

萌花が顔面蒼白にして目を背けた。確かに女の子が見るもんじゃねえ。

「先代を殺した時にすぐに切り取りましたから鮮度は良いですよ」

「あなた、自分の父親を殺したの？」

普段は温厚な夏恋が激昂していた。あんな夏恋の顔を見たのは初めてだ。

「ただ、オレは岩金に対する怒りは湧いてこなかった。オレだって一つ間違えれば親父

を殺してたかもしれないんだ。いや、殺していた。オレは夢の中で何度も親父を殺していた。

「そうですね。組を解散して財産は私には譲らず海外で余生を過ごすなどと不拔けたこと

を言うものですからね。ですが、さすがの私も軽率な行動をしたと後悔してますよ。金庫

一つ開けるのにここまで苦勞させれるのですから」

「あんたつて男は！」

「お止め！」

殴りかかろうとする夏恋をばあさんが制した。

「萌花は私の弟子だ。私が助ける」

「梅子さん？ こんな最低男の言うこと聞いちゃうつもり？」

「ばあさんは岩金の前に出る。」

「先代とやらの名を教えてもらおうか？」

「岩金剛蔵いわかねいさうですよ。最初から言うことを聞いていれば痛い目に遇わずにすんだというのに、バカな方ですね」

「あんたほどじゃないけどね」

「ばあさんは思い切り皮肉ると、激怒する岩金を無視してその場に正座すると両手を合わ

せて何やらお経を唱え始めた。ばあさんの体がゆっくりと揺れ始める。

「岩金剛蔵の魂よ。我が肉体に宿り給え」

揺れが治まると、ばあさんの頭がガクッと垂れた。

「これが口寄せ？」

オレは息を飲んでそれを見入っていた。

## 第4話 - 2

「祐作よ……」

顔を上げたばあさんの口から聞いたことのない男の聲が発せられた。

オレの背中に悪寒が走った。

「間違いない。先代の声です。柏木、早くこれを金庫のキーへ」

岩金は小ビンを柏木に手渡そうとする。

「愚かな息子よ……。その金庫には最初からカギなどかかってはおりなかったのだ」

「何ですって？ 柏木！」

「はい」

柏木は小ビンを受け取ることなく、金庫を開けるレバーを引いた。扉はゆっくりと開いていく。

「四代目」

呆気にとられながらも岩金の指示を仰ぐ柏木。

「中を確認しなさい！」

柏木は金庫の中に入ると、納得のいかない顔で封書を持ってすぐに出てきた。

「四代目、中にはこれしか入ってなかったんですが」

岩金は柏木からその封書を取り上げる。さっきまでの卑しい傲慢な笑みが消えていた。

中から一枚の紙切れを取り出した岩金はそれを黙読した。岩金の表情がどんどん引きつっていく。

そんな岩金を見ながらばあさん、つまり岩金組先代組長は、

「あれはワシの最後の賭けじゃった。組を解散すると言えば強欲なお前のことだ。ワシを

殺しても財産を手に入れようとするだろう。だが、もしお前がワシを殺さなければ全財

産はお前に譲るつもりでおった。じゃが、お前はワシを殺した。お前にやる金は一銭もない。

「残念じゃったな、バカ息子よ」

手紙と同じ内容を語ってくれた。

岩金は読み終えた手紙を破り捨てた。

「何が賭けだ！ ふざけたことじゃがって！」

こめかみに青筋を立てて、岩金は懐に納めた小ビンを取り出すと、床に投げ捨てた。

「こんなもの！」

割れた小ビンから飛び出した眼球を岩金は踏みつけた。

ぷちつという不快な音が耳についた。

あまりの惨劇に萌花は気を失った。

「四代目、オレは用を思い出したんで」

「あつしも」

柏木と杉田は顔を引きつらせながら、地下室から慌てて出ていった。

金がないとわかったとたん、従う気がなくなっただけでわけか。金の切れ目が縁の切れ目

ってわけか。義理人情の任侠道も地に落ちたもんだな。

「何もかも終わりだ……」

「哀れね。自分の父親だけでなく子分にまで見離されるなんて」

茫然とする岩金を見て、夏恋が誰にといいわけでもなく呟いた。

オレもこうなるのか？ そのうちみんなから見離されちまうのか

？ 一人取り残されち

まうのか？

オレは未来の自分を見ているようで不愉快な気持ちになった。

「もう一度地獄に送ってやる、クソ親父が！」

岩金がいきなり拳銃を取り出して、ばあさん目掛けて発砲した。

「あぶない！」

夏恋はばあさんの体を抱えて飛んだ。弾は誰もいない床を弾いた。

「どいつもこいつもオレのことをバカにしゃがって！ こうなったら全員道連れにしてやる！」

岩金は狂気の笑い声を上げながら、ソファーの上に倒れている萌花に銃口を向けた。

やばい。完璧にプツン切れてやがる。

オレの体は無意識のうちに岩金に体当たりしていた。照準の反れた弾丸は天井を弾く。

「クソガキがつ！」

激昂した岩金はその銃口を今度はオレに向けて発射した。

弾がオレの左腕を貫く。

「っ！」

「翔ちゃん！」

痛いなんてもんじゃねえ。傷口がズキズキして燃えるように痛い。もう少しずれてたら

心臓に当たっていたかもしれない。

そう思った瞬間、オレは初めて死を意識した。

今まで死ぬのなんか怖くねえって思っていた。そう思うことで自分の士気を昂ぶらせて

いたにすぎない。本当は誰よりも死ぬことが怖かったんだ。

オレに殴られてきた奴もこんな恐怖を味わってきたんだろうか。だけど、オレはそんな

気持ちに気付こうとはせず、ただイライラを解消するだけのためにいろんな奴らを殴ってきた。

天罰ってやつなのか？

「翔！」

ばあさんの声が微かに聞こえてくる。先代組長の霊はいなくなっ  
ちまったのか。

逃げねえと今度こそ間違いなく殺される。だが、恐怖で体が硬張  
ってしまっと思ってよう  
に動かねえ。

「死ね！」

岩金がトリガーを引く。

「翔ちゃんっ！」

夏恋の声は銃声とほぼ同時に聞こえた。

夏恋が飛び出してきて、オレの体をかばうように抱き締める。

岩金が発射した弾が二発、オレではなく夏恋の背中に命中した。

オレの眼前で夏恋の体

が二回小さく揺れた。

「お前……」

「大丈夫よ。教授が作ったボディはそんなに柔じゃないから」

驚愕するオレを安心させるように、夏恋は得意の小悪魔的な笑み  
を作ってみせた。

その後、三回の銃声が鳴り響き、夏恋の体も三回揺れた。

正気を失っている岩金は弾が切れたことに気付かず、ずっとトリ  
ガーをガチャガチャ引

いていた。

「よくも私の大切な人を傷つけたわね！」

立ち上がった夏恋は岩金の顔面を殴りつけた。吹き飛んだ岩金は  
金庫の扉に体を打ちつ

けると、泡を吹いて卒倒した。

「あれ？」

足をふらつかせて夏恋が座り込んだかと思うと、パタリと倒れた。

「おかしいわね、力が入らない」

「おい、どうしちまったんだよ？」

オレなんかかばつちまうからどつか壊れちまったんじゃないか？  
オレは左腕の痛みも忘れて夏恋の体を抱き起こした。

「翔ちゃん、ケガは？」

「こんなの掠り傷だよ。お前こそどうしてオレなんかかばったりしたんだよ？」

「だって、翔ちゃんは私の大事な人なんだもん」

「ロボットのくせに何言ってるんだよ！」

「ロボットのくせに、かぁ。その言葉けっこう堪えてたのよねえ」  
夏恋は微笑する。

「翔ちゃん。私はね、桃子さんの願いを叶えるために作られたんだよ」

「母さんの願い？」

夏恋は小さくうなづいた。

「そう。一人で老いていく梅子さんのことが心配だから、自分の代わりにイタコになって

梅子さんのそばにいてくれるロボットを作ってほしいって教授にお願いしたの」

「桃子がそんなことを？」

萌花のロープを解いたばあさんが歩み寄ってくる。

「桃子さんは後悔してたの。かけおちなんかせずに、梅子さんに教授のこと認めてもらえ

るまで何度でも説得すればよかつたって」

その話を聞いたばあさんは涙を流していた。

知らなかった。母さんがそんなこと思ってたなんて。

「そして、教授は私をやっと完成させたの。だから、教授は好きで翔ちゃんのことを放つ

たらかしにしてたわけじゃないのよ。それだけはわかってあげて」

「さつきは心のない人形だなんて言ってるすまなかつたね。お前さんはやさしい心を持った

立派な人間だよ」

ばあさんは夏恋の右手を握り締めた。

夏恋はどこかテレくさそうな笑みを浮かべた。

オレはこぼれそうになる涙を必死に堪えていた。声を出せば泣き叫んでしまいそうで、

オレは夏恋に言葉を掛けてやることができなかった。言いたいことはいっぱいあるっていうのに。

「ありがとう、梅子さん。あ、もうダメ……みたい」

夏恋の目が閉じていく。

「夏恋！ 夏恋！」

堪えていた涙が言葉と一緒に一気に溢れだす。

「死ぬな、夏恋！ お前はそんな柔な女じゃねえんだろっ！」

「うれしいな。翔ちゃん、やっと名前呼んでくれた」

「こんな時に何言ってるんだよ！」

「翔ちゃん、教授と仲良くね。また……」

オレの腕に夏恋の重みがずっしりと伝わってくる。

「夏恋？」

オレは夏恋の体を揺らす。しかし、夏恋は動かない。

「おい、夏恋。何ヘタクソな演技してんだよ？ なあ、夏恋！ 夏恋！」

恋！」

オレは夏恋の体を抱き締めていつまでも泣き叫んでいた。

## 第5話

退院したオレは家に戻った。数日ぶりの我が部屋は懐かしいようでもあり逆に新鮮に思えた。この間まで不快でしかなかったウグイスの鳴き声さえ今は心地よく感じる。

入院中はばあさんや萌花が毎日見舞いに来てくれた。けど、親父はあの日夏恋を研究室に連れて帰ったきり一度も見舞いに来なかった。

夏恋はどうなったんだろう？ オレはロボットの事なんかよくわかんねえけど、AIさえ無事なら何とかなるんじゃないのか？

行ってみつかない、親父の研究室へ。

けど、どのツラ提げて親父に会いに行けばいいんだよ。

ベッドの上で自問自答を繰り返していると、ドアをノックする音が聞こえた。

「翔くん、いいですか？」

親父の声だった。

「あ、ああ」

オレの返事を待つて、親父が部屋に入ってくる。オレは親父と目を合わせることができなくてうつむいた。

「傷の具合はどうですか？」

「別に」

オレは親父とどう接したらいいかわからなかった。今更仲良く話なんかできねえ。

「翔くん、こんなこと言うのは今更ルール違反かもしれませんが」  
親父はベッドに座ってくる。

「僕はいくじなしでした。桃子さんの願いを叶えるためだと自分に  
言い訳して、桃子さん

が死んでからもずっと翔くんのことを放ったらかしにして真正面か  
ら向き合おうとしなかつたんですから」

「親父……」

「そして、今度は夏恋に翔くんのことを押しつけようとしていたの  
かもしれません」

「あ、親父……その夏恋は」

「翔くん」

オレの質問は親父の言葉にさえぎられた。

「忌野神社に行きませんか？」

断る理由も見つからず、オレは親父と一緒に忌野神社に向かった。

忌野神社へ続く階段を登り鳥居をくぐったオレたちを待っていた  
のは。

「夏恋？」

境内で掃除をしている巫女さん姿の夏恋だった。オレに気付いた  
夏恋は竹ぼうきを放り

捨ててこっちに駆け寄ってくる。

「見て見て、翔ちゃん！ 似合っ？」

夏恋は両手を広げて一回転して巫女さん姿を披露した。

オレは酸欠の金魚みたく口をパクパクさせた。

「梅子さんが弟子入りを許可してくれたのよ」

「か、夏恋……、お前死んだんじゃ？」

オレは親父を見た。

「僕としたことがうっかりしてまして。夏恋の起動時に乾電池がなくて、研究室にあった

時計から拝借したんです。またその電池がアルカリではなくマンガンだったもので」

「早い話が電池切れってことかよ？」

「そういうことです」

親父は悪びれもせずいつもの子供じみた笑顔を振りまきながら説明してくれた。

「たたく、何がロボット工学の権威だよ。凡ミスしやがって。」

「ばあさんも萌花も見舞いに来てたのに、どうして何も教えてくれなかったんだよ？」

「私が口止めたの。翔ちゃんを驚かせてやろうと思って」

夏恋はいつもの小悪魔的な笑みを浮かべた。

「おいおい、じゃああの時オレが流した涙は一体何だったんだよ？」

オレが戸惑っていると、夏恋はオレの右腕に抱きついてくる。

「でも、私うれしかった。翔ちゃんがあんなに私のこと心配してくれるなんて」

「ベタベタしてくんなよ、乳デカ女のくせに！」

オレはテレクさくて悪態をついて、夏恋を振りほどこうとした。が、夏恋は気持ち悪い

くらい満面の笑みを浮かべてオレの腕を離そうとしなかった。

「翔ちゃん、だーい好き！」

夏恋の大きな声が忌野神社に響き渡った。

オレはため息混じりに、口元に小さな笑みを浮かべた。

終わり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9503d/>

---

不良少年とイタコロボット

2010年10月11日02時07分発行